

新しい遊具が子どもの遊びにもたらす影響

～やぐらを中心に～

大谷 真理子・佐々木 由美子

The Influence New Playground Equipment Brings to Children's Play

Mariko Otani Yumiko Sasaki

要 旨

我が国の保育は長年、遊びを通しての教育をその中核に置き、子どもの主体的な遊びを尊重し、その中で学びの基礎となる体験を積み重ねていく実践を重ねてきた。しかし、近年はその主体的な活動としての遊びについて多様な実践が報告され、中には本来の遊びからはかけ離れているのではないかと思われる実践も散見される。保育の質が叫ばれる今日、遊びを捉えなおすこと、そこで子どもが発揮する力を確認することが、本来の遊びを大切にしたい実践を行う上で重要と思われる。本研究においては、園庭環境を改修しやぐら等新設した園の遊びに着目し、新しい環境であるやぐらの中で子どもがどのような遊びを展開し、どのような力を発揮するのかを観察分析した。これにより、子どもが自らの力で環境に働きかけ、仲間や環境との相互作用を繰り返しながら、新しい場での習慣やルールを作り出す力を発揮していることが示された。

キーワード：遊び、仲間、ルールづくり、環境に働きかける力

1. はじめに

(1) 問題と目的

幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領の改訂、実施に伴い、保育の質の向上が声高に叫ばれるようになっている。特に学びの過程の質が問われている現在、元来、我が国の保育が中核としてきた、主体的で対話的な活動である遊びを通しての教育の価値が再認識されるべき時であるといえる。遊びを通しての教育は、子どもの自由な発想と興味、関心から発する自発的な活動である遊びの中に学びの芽を見出し、効果的に援助することによって、子ども自身が学びの基礎となる体験を積み重ねていくものである。

それにもかかわらず、今回の改訂以後、子ども

の生活とはかけ離れたテーマを投げかけ、保育者主導のもとに行われる主体的・対話的風な保育実践が増えているように思われる。例えば、保育者がドイツについて子どもたちに投げかけを行い、ドイツに関する活動を展開し、最後にはドイツ風のお店屋さんごっこを行うといった実践である。もちろん、保育者の投げかけを発端に、子どもたち自身の遊びとして展開することもあるだろう。しかし、その実践では最初から最後まで、テーマに即した活動が保育者の計画通りに行われていた。子どもたちがテーマに興味を示したことを「主体的」、子どもに意見を聞くことを「対話的」と捉えた、主体的風に演出された遊びともいえる。

このような状況の中、保育の質を高めるためには、改めて遊びについて再考し、遊びのなかで

発揮される子どもたちの力を見出していくことが必要なのではないだろうか。

遊びを考える上で、子どもをどのように捉えるかによってその実践は大きく変わる。例えば「約束事を教えなければ、望ましい遊び方ができない」と考えるならば、どんなに良い環境を用意しても、決められた約束事の中で行動することを学ぶ遊びになるだろう。また「遊び方を提示し、それに倣うように遊ぶことがよい遊び」「実践書にあるような展開が豊かな実践」と遊びを捉えるならば、そこには真に子どもの豊かな発想や子ども自身よっての展開は見ることができない。それは保育の質を確保していく上で大きな課題となる。本研究においては、子どもの主体的な遊びが生まれてくる姿に着目し、丁寧に遊びを捉えなおすことを目的とした。

そこで本研究においては、従来の園庭を大幅改装した園の園児たちの姿を検討する。A園では年度途中での園庭の大幅改装を行った。A園は遊びの中で子どもが学び、育つことができるような保育を目指している園であり、子どもが自ら試行錯誤すること、遊びを作り出すことのできる園庭を作ること、遊びを改装を行った。それまでの園庭は機能的な課題のほか、子どもの力に合っていない遊具が設置されていたり、遊びがぶつかり合ったりする等の課題があった。それらを解消するため今回の大幅改装に至った。この改装によって、子ども達が自ら遊びの場や遊び方をゼロから築いていくことが想定された。この園庭の改装当初の時期は、子どもの遊びを捉える上でまたとない貴重な時期であると考えられる。そこで、新しい園庭でどのような遊びが生まれてくるのか、仲間とどのように影響し合っていくのか、加えて新しい遊具に関してどのように新たなルールが生まれてくるのか、子どもたちの姿を明らかにしたい。

尚、今回は改装工事の中で新設された「やぐら」に着目し、考察することとする。

(2) 研究方法

A園の園庭改修工事以降の遊びの観察記録および振り返りから、やぐら遊びに関するエピソードを抽出し、分析する。

観察記録は筆者並びにA園6名の保育者による。事前に記録用紙を配布し、園庭遊びについて気付いた点、興味深いエピソードを書いていただく。また、園庭遊びに関する振り返りの座談会を行い、エピソードの収集を行う。座談会はボイスレコーダーに録音し、筆者が話題ごとにエピソードとして書き起こす。

座談会実施日 2019年1月7日

出席者 筆者ら2名、保育者6名（内筆者1）

(3) A園の概要

首都圏に位置し、住宅街の中の小規模園。

園児数 54名（2019年1月現在）

教職員 10名（内常勤保育者6名）

保育の形態は自由な遊びを中心にしながらクラス活動も毎日行われる。

(4) 改装工事の概要

A園では園児募集対策及び、不備解消を目的として段階的に保育環境の見直しを進めてきた。園庭改装に際しては2年前より話し合いが進められ、子どもが自分の力で挑戦できる遊具の導入、隠れられる場所作り、高低差がある園庭等、保育者の要望をもとに行われた。

以前の園庭（図1）は遊具が点在しており、そこへの行き来とごっこ遊びや、運動遊びがぶつかり合うことが多々あったが、改装後（図2）は遊具をほぼサイドBにまとめたことで、それぞれの遊びの場を確保することができるようになった。また、やぐら（写真1）は3階建てで、特に3階は自らの力で登ることを基本とし、高所での身のこなしができない子どもが登ることができない造りになっている。

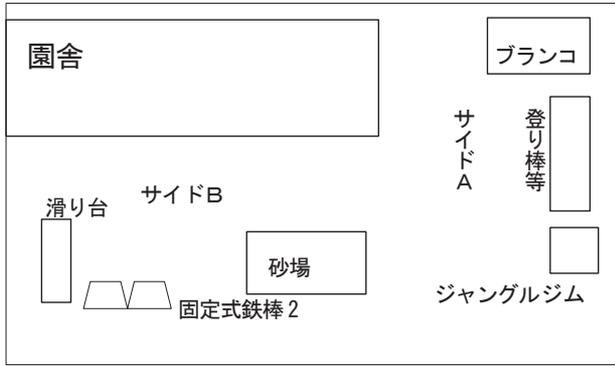


図1 改装前の園庭

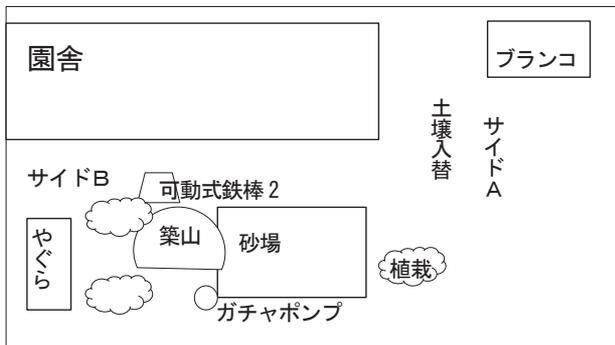


図2 改装後の園庭



写真1) やぐら

2. 観察の記録

(1) やぐらと向き合う

エピソード1

9/3「挑戦するA」(記入保育者C)

登園するなり「Aちゃん初めて見るからなあ」と関心を示す。身支度を済ませやぐらへ行く「これするの初めてなんだよ」と独り言をいしつつ1階内に入り、2階へ上がる梯子を見つけ下から上方面へ視線を向ける。難しそうだと

思ったのか慎重に梯子に手を掛ける。梯子に手を掛けると揺れるのが気になり怖いようで、この日は梯子の2段目に手を、1段目に足をかけるだけで終了した。自分で「ここまで」と決めた。

エピソード1は改装当初の年少児の姿である。この改装では子ども達が自らの力でどのような遊びを作り出すかに期待して、安全上いくつか決めた約束事以外は、約束事は決めていなかった。しかし、その安全上の約束事の一つが、やぐらの登り下りは大人が手伝わないというものであった。Aはそのことも理解しており、自分の体と怖さに向き合い、自分の意志で挑戦のレベルを決めることができていた。また、毎日少しずつ挑戦していく中で縄梯子の揺れ方などやぐらの性質を学んでいると考えられる。

エピソード2

10月「やぐらで大号泣」(記入保育者B)
年長G。部屋に入ってくるなり「怖すぎた。大変だった」と話してくる。よく聞くとやぐら3階の外壁に登ったとのこと。事情を聴きに園庭にいた保育者Dに聞くと、年長のHがやぐら2階外壁を登り一周するのを見たGが3階によじ登り一周しようとした途中で怖くなり大号泣。保育者Dが寄り添い、声を掛けながらなんとか安全に降りたとのこと。安全のため3階外壁には登らないことになっていたが、友達からの刺激でやってしまったようだ。このことは園中の人が見聞きしており、その後誰も3階外壁を登る人はいない。日頃強いGの号泣に危険度が伝わったのではないかと。

このエピソードはエピソード1でも述べた、最初に設定していた約束事に関するものである。やぐら(写真1)は写真で見てわかる通り、外壁部分には登るところは作られていない。しかし、2階部分は、高さもさほど高くないことから外壁部分をつたって

行くことを、保育者は想定していた。ただし、3階外壁については危険と判断し「3階外壁には登らない」という約束を設定していた。このエピソードの後、保育者はGの行動について他の園児に話したり、注意を促したりすることはなかったが、この件はいつの間にか誰もが知るところとなっていった。これは子どもたちが園内で起こっていることを、しっかりと取り入れ、自分の行動に反映していく姿と読み取ることができる。また、大人が設定したルールも、子どもが経験を通してその必要性を理解することで、集団自体がその必要性をしっかりと認識し定着させていくことができることも示唆している。

(2) 仲間と影響し合う

エピソード3

9/6「ごっこあそびの始まり」(記入保育者B)
 年中のB、C、D、E達がやぐらにカラーコーンや、自分達の水筒を持ち込み警察ごっこをはじめた。昨日やぐらでおうちごっこをしていた年長Fが保育者に「警察ごっこだけど入れてもらった」と話しに来る。ごっこのイメージよりやぐらで遊ぶことが主の様子。



写真2) 年中児のごっこ遊び

エピソード3は導入数日後の記録である。ここで分かる通り、前日はやぐらで年長児がごっこ遊びを始めていた。その翌日がこのエピソードである。年中児が前日の年長児の遊びを見ていたという記録は残っていないが、やぐら自体に挑戦する遊び

方が続く中で年長児がごっこ遊びの舞台としたことを見て、「年長さんがやっていたからよいのだ」というように、翌日すぐに模倣したと考えられる。また、Fも昨日の続きをしたいと考えていたようだが、年中児の遊びに入ることで「やぐらでごっこあそびをする」という目的を果たす。子どもにとって魅力的な遊具であるやぐらに数組の遊びが重なることで、異年齢の関わりや模倣する力が顕著に表れたといえる。

(3) やぐらの性質が引き出すもの

エピソード4

「いれるか入れないか」(座談会)

最近ではやぐらを年中が占拠してごっこ遊びをすることが多い。そこに入りたい年少児が行ってもいれてもらえないことが多く、保育者が仲介に入ってもらおう。年中の子ども達は自分たちのごっこ遊びに入ってこられるのは嫌なのだが、やぐらに挑戦するために入ってくるに関しては否定せず受け入れる。また、年長児が鬼ごっこの逃げ場として通り過ぎていくことに関しても拒否しない。ごっこ遊びの舞台としてのやぐらと、挑戦する遊具としてのやぐらという性質を受け入れた遊び方になってきているのではないかと推察される。

これは、やぐらでのごっこ遊びが定着してからのエピソードである。やぐらは、エピソード3でもわかる通り、その登り下りに挑戦して楽しむだけでなく、ごっこ遊びの場としても機能していた。そのため、それらの遊びが混在することになる。しかし、このエピソードが示す通り、年中児は自分たちのごっこ遊びのイメージを壊さないのであれば、他のグループが入ってくることを許容できている。これは、年中児がやぐら遊びの様々な側面を経験しているからこそ、相手の遊びを実感として理解していることの表れである。お互いの遊びが視野に入るというだけの「見える」ではなく、お互いの遊びの内容やそこでの相手の、つもりをも感じ取る

「見える化」が起こり、このような姿が引き出されたということができないのではないか。これはやぐらが前に述べたように挑戦する側面と家的な佇まいという二つの性質を併せ持つ複合的な遊具であるということが引き出した姿ということができる。

エピソード5

11/18「劇遊び」(記入保育者E)

劇遊びを連日のようにお部屋でやっていた年少の子どもたち。午後園庭で遊んでいると、Iちゃんが「ここでおおかみやろうよ」と言い、やぐらをお家に見たてて劇遊びが始まる。おおかみ役をしている子は、手を土で黒くしてみたり、おおかみが、のどが渴いて井戸水を飲むところを水道で水を飲んでみたりと、園庭でやることでイメージを発揮して楽しんで遊ぶことができている様子。

これは年少児が遊びのイメージを、やぐらの造りと重ね合わせ、発想豊かに遊ぶ姿である。家的な佇まいが、子どもの「おおかみと七ひきのこやぎ」のイメージを引き出し、これまでの遊びの経験と合わせて、やぐらを用いて展開させている。ここには記載しなかったが、この他にも、四角い窓を飛行機の窓に見立て旅行に行ったり、登り棒から発想して消防署として利用したりとやぐらの造りが子どもたちのイメージを膨らませる様子を多々見ることができる。

(4) 新たな習慣、ルールの芽生え

エピソード6

「玩具の持ち込みと掃除」(座談会)

11月頃には3階まで砂場の玩具やカラーコーン、タイヤ、砂等を持ち込む。やぐら内が汚れること、運び出しの際下へ物を落とすなどの懸念はあったが、保育者は成り行きを見守る。年長児は以前やぐら内が汚れ遊びにくいことでトラブルとなった経験から、たくさんの物を持ち込むことはなくなっている。しかし、

年中はごっこ遊びの道具として必要な、たくさんの玩具や砂を持ち込み、やぐら内は汚れる。その頃より、年長児が帰り前の片づけの時間にやぐら内をほうきで掃き掃除を始める。できるだけ長く外で遊んでいたいという動機もあると思われるが、遊びの場を整えておきたい思いが働いていると思われる。



写真3) バケツに砂を入れてロープで引っ張り上げる

3月15日(記入保育者B)

卒園式前日、年長児は、自由遊びの中で今まで使った遊具や、遊び場を片付けている。お気に入りの場所としてとっていた場所をきれいにしたり、砂場の玩具を水洗いしたりする。年少、年中児が保育室に入り、園庭にはクラスの半分くらいの年長児しかいない。すると、誰から始まったのか、そこにいた全員がほうきをとってきて、やぐらの掃除を始める。やぐらから砂を集め、砂場に戻す作業が続く。ここ数日は卒園関係の活動が続き、自由遊びの終わりが慌ただしく、遊び後のやぐら掃除は見られなかったが、この日は名残を惜しむかのように丁寧に行っていた。



写真4) やぐらの掃除をする年長児



写真5) やぐらから砂を掃き出し砂場に戻す

これは、やぐらの掃除を始めた年長児のエピソードである。前半部分は年長児の掃除が始まった経緯であり、それまでの遊びの中で、3階までタイヤや砂を持ち込んで遊んだ年長児は、そこで狭さと汚れを原因としたトラブルを経験していた。そのため、それ以降、さほどたくさんの物をやぐらに持ち込むことはなくなっていた。しかし、年中児はごっこ遊びの中で様々なものを持ち込むことが続いていた。その中で、年長児は自分たちが汚し、トラブルになった時に掃除したように、片付けの時間に掃除することを始めたのである。しかし、保育者は、この掃除がエピソードにも書かれているような「長く遊んでいたい」という動機だけかどうか、疑問を

もっていた。そのため、注視していたところ、その後もこの行動は何度となく繰り返され、後半のエピソードのように、卒園間際には、自分たちの遊び場として愛着をもって掃除している姿が確認された。

このように、年長児は自分たちが体験したトラブルから、持ち込む玩具の量を調整したり、砂はたくさん持ち込まなかったりと自ら混乱を収束させていることがわかる。また、他の学年が汚したのであっても、自分たちの場として整えておきたいという思いが湧き、掃除という習慣的な行動に至っている。これは、年中児が起こした混乱を年長児が収めた姿であり、集団として一時期の混乱を収めていく力があることの表れであると考えられる。また、子ども達が必要に応じて、自らルールを作り出し始めた姿と捉えることができる。

3. 総合考察

今回の観察記録から、子どもがやぐらという初めての遊具に向き合っていく中で、新しい環境をどのように理解し、自ら働きかけていくのか、その中でどのような力を発揮しているのかについて確認することができた。その内容を次の4点にまとめる。

第一にやぐらという物と向き合い、実感をもって理解していく姿である。エピソード1では自分の身体能力を最大限発揮して登ることに挑戦することで、このやぐらの構造を理解するとともに、自分の持っている力にも向き合っている。子どもは遊びの中で、環境の一つとしての物と向き合うことを通して、自分自身の力や感情と向き合い、自分に関する認識を深めている。エピソード2でも、やぐらの3階外壁の高さやそこで感じる恐怖、不安定さを実感し、与えられているルールの意味を理解するに至っている。それに加え、その様子を見聞きした周囲の子ども達が「3階外壁に登らない」というルールについて徹底して守っており、友達の姿を敏感に感じ取る力を発揮し、影響し合い、他者の経験を通して物と向き合う経験としていることがわかる。この点は次項の「仲間と影響し合う」にも関連するところである。

第二に仲間と影響し合う姿である。前項にあげたエピソード2に加え、エピソード3では年中児が年長児の姿を即取り入れて、遊びを展開している。初めて向き合うやぐらという遊具の遊び方について、当初はその登り下りに挑戦するだけだったが、年長児が家として使う姿を見て、新たな使い方を模倣したものと考えられる。初めての環境に働きかけるとき、自分より力あると感じている年長児の動きを頼りにし、安心して遊び方を広げていく年中児の姿と捉えることができる。このように、子ども達が仲間の力を的確に捉え、取り入れて遊びを進める力が発揮されたということが出来る。

第三にやぐらの特質が子どもの力を引き出し豊かに遊ぶ姿である。エピソード4ではやぐらが、その登り下りについて試行錯誤してチャレンジする要素と、家的な佇まいとを併せ持つ、複合的な遊具であることから、お互いの遊びへの理解が生まれ、相手の遊びを許容する思いが芽生えている。それまでの園庭に設置されていた、滑り台やジャングルジムでは、その場に陣取った子ども達が他の人が入ってくることを拒む姿がしばしばあったことを考えると、やぐらという環境によって引き出された姿と言える。また、エピソード5のごっこ遊びのイメージが引き出される様子も、やぐらの造りや高さ、入り口の形状などからイメージが掻き立てられていると考えられ、これもやぐらの性質が引き出した姿ということが出来る。子どもとやぐらという環境との相互作用が、遊びの持続性や展開に大きく寄与しているということが出来る。

第四に新たな習慣、ルールの芽生えである。エピソード6では共有する場所を整えるための掃除が習慣づいていく様子が見て取れる。新しく設置された魅力的な遊具への親しみと、自分たちの場であるという思いとが、場を整えていく力となって発揮されたと考えられる。また、この子ども達の様子に大きく影響した事柄としては保育者の関わりがある。保育者はやぐら内に物を持ち込むなどの行

為について、禁止をせず見守る姿勢を見せたことで、やぐら内の汚れ等の混乱に呼応するように年長児の掃除が始まり、ルールの芽生えも見られた。これは、身体的なチャレンジだけでなく、場に反応する子どもの自発的な活動を制限しない関わりによって、一時の混乱も子どもたち自身が収めていく力が発揮された結果と考えることができる。

加えてこの観察期間の翌年の年長児も秋以降、自分たちが持ち込んだ大量の遊具や砂を始末するために掃除をする姿があり、その年度末には年中児が掃除をはじめ「年長さんになったみたい」と発言していたとの報告を保育者Eから受けている。前年度の年長児の姿がどの程度影響しているのか検証はできないが、子ども達が必要性に応じ、自然に場を整えていく力を発揮することができるということ、園をリードしていく存在としての年長児の役割として、このやぐら掃除が認識され定着してきていると考えることができるのではないかと。

今回、子どもにとって新しい環境であるやぐらに着目することによって、子どもの遊びが変化している様子を捉えることができた。この過程は①やぐらと向き合いその性質を知る時期、②仲間の姿が見えるようになり、遊び方が広がる時期、③多少の混乱とその収束、④ルールの芽生えや定着、という過程をたどっていることもわかる。子どもの遊びは子ども自らが環境に働きかけ、その事象について実感をもって知り、周囲の人との関わりの中で、影響し合って深まっていくものである。その姿が今回の観察を通して改めて確認することができた。加えて、子ども自身が場にふさわしい習慣やルールを作り出していく力が発揮されることも確認することができた。これは、子どもの持つ遊ぶ力を再認識し、遊びを通して学ぶことを支える保育を実践していくうえで欠いてはならない視点であると考えられる。

(おおたに まりこ) 百合丘めぐみ幼稚園
(ささき ゆみこ) 東京未来大学